



Takemura Makio 竹村牧男『ブッディスト・エコロジー：共生・環境・いのちの思想学』 [Buddhist Ecology: Symbiosis, Environment, and Ideas of Life]

Tokyo, Nonburusha, 2016, 312 pages. ¥3,000. ISBN: 978-4903470986.

2015年12月、気候変動抑制に関するパリ協定が採択された。しかし、その後アメリカのトランプ大統領が脱退の意を示しているように、この問題に対する国際的足並みは依然揃っていない。地球温暖化に限らず、大気・土壌・水質の汚染、生態系の破壊といった環境問題が騒がれるようになったのが1960年代であるとする、それから既に半世紀以上の月日が流れたことになるが、我々は未だこの問題に対して態度を決めきれないでいるように思われる。そのような中、我々が意識的・強制的に生活を変えずとも問題を解決してくれる可能性として期待されてきたのは、“新たな”技術の開発である。具体的には代替エネルギーによる発電や浄化技術などが注目されている。しかしながら、日々世界中で進行する開発・工業化の規模とスピードを前にしては、これらの新技術は焼け石に水を注ぐような効果しかもたらさないのではないかという不安感はいくつも湧いてくる。

新たなものを求める動きに対し、本書の著者が試みるのは真逆の方向、すなわち古代に誕生した宗教である仏教の思想に解決の糸口を探るといえる。まさに「温故知新」の実践によって、これからの世界のあるべき姿を構想しようとするのだ。

現在東洋大学の学長を務める著者は、日本を代表する仏教学者の一人であり、丁寧で明解な解説で定評の『入門 哲学としての仏教』（2009, 講談社現代新書）の著者でもある。2016年10月に刊行された本書は、これまで東洋大学の数々のプロジェクトで「共生」や「エコ・フィロソフィ」といったテーマに取り組んできた著者が、講演やエッセイといった形で発表してきた研究成果を一冊にまとめたものである。

著者自身が「やや刺激的」と呼ぶタイトルを持つ本書は、仏教思想研究としても環境思想研究としても得るものの多い“二重に美味しい”本となっている。ただし仏教の基礎的知識がない場合、読者は各時代の思想の配置が分からずやや苦労するかもしれない（その場合、前掲書『入門 哲学としての仏教』を読んでからこちらに進んでも良いだろう）。本書は「共生」・「環境」・「いのち」をテーマとした三部構成となっており、扱われるテキストは実に多岐にわたる。具体的には、著者が専門とする唯識思想に加え、原始仏典から空海、道元、大正時代の日本の共生思想まで、また一部ではあるが西田幾多郎や鈴木大拙も登場する（著者には『〈宗教〉の核心：西田幾多郎と鈴木大拙に学ぶ』（2012, 春秋社）など彼らの思想をめぐる著作もある）。

本全体を通じて一貫して見られる著者の態度は、そもそも我々はどうのような存在なのかという本源的な問いから社会のあるべき姿を構想しようというものである。新技術の開発や個人の生の強制的抑制といった対策は、人間の生活と環境的条件との不適合の問題に対する根本的な解決となるとは言い難い。そうではなく、自己と環境・他者との関係を問い直し、「本来の人間のあり方・生き方が実はおのずから持続可能な未来を展望するのだとしたら、その道こそ追求されるべきである」（p. 44）と著者は主張する。このような主張の裏には、仏教の思想こそが環境や他者と不可分なかわりの中にある我々のあり方を示すという著者の確信が見られる。「まず心（識）があって、その中に身体と環境とが維持されて」（p. 144）いるという唯識思想の解釈などを通じて、著者は単に環境の捉え方ではなく、我々自身の自己了解の大きな転換を促す。

また本書では西洋に対して批判と協同両方の態度が見られる。著者は一方で、東洋の仏教を評価するという立場から、今日の環境問題の原因としての西洋近代化を批判する。しかし他方で、仏教とノルウェーのアルネ・ネスらのディープ・エコロジーの思想とに見られる共通点を挙げながら、「東洋と西洋の思想が一致して同じことを主張する状況を、深く考慮すべき」（p. 176）と今日の東西の協同可能性を指摘する。具体的には、本書では我々の行動指針として三聚浄戒という大乘仏教の戒律を現代の状況に合わせて改めた〈新三聚浄戒〉が提唱されるが、これを環境問題の具体的な取り組みにつなげていく際にはネスが示したライフスタイルが大いに参考になると著者は期待する（p. 224）。

このように射程の広い本書であるが、やや気になったのは、時に一つの論考の中で異なる仏教宗派の思想が連続的に論じられていることである。それこそ一つの思想に

縛られない自由な立場ともいえるが、素人目からは各論の整合性について判断することが難しい箇所があった。また、複数の場で発表された論文をまとめたものであることもあり、論考の間のつながりが見えにくかった。欲をいえば、各派の思想を踏まえた上で、著者自身の哲学、すなわち著者自身は人間・環境をどのように見ているのかをもっと知りたいと思われた。

しかし、対象とするテキストが広範囲に渡る本書が、読者に数々の時代の仏教思想への扉を開くことは確実である。また、思想研究を中心とした本書は環境問題に対する応用面でやや不足があると著者自身述べているが、〈新三聚浄戒〉という手がかりが提案されていることは今後の研究にも有用だろう。東洋大学のプログラムの成果は、同じノンブル社から『エコ・フィロソフィ入門：サステイナブルな知と行為の創出』（2010）、『サステイナビリティとエコ・フィロソフィ：西洋と東洋の対話から』（2010）、『自然と命の尊さについて考える：エコ・フィロソフィとサステイナビリティ学の展開』（2015）なども刊行されており、本書を読んで興味を湧いた人にはさらにこれらも参照することが薦められる。日本哲学に従事する研究者はもちろん、地球に生きる一人一人にかかわる問題として多くの人に本書が読まれることを望む。

INUTSUKA Yū 犬塚 悠
The University of Tokyo